

くもと夢

むかし、あるところに、ふたりの男がいました。ふたりは貧しくて住むところがないので、荒れた長者屋敷跡で寝泊まりしていました。

ある日のこと、ひとりの男がふっと見たら、庭の泉水の中からくもがいつぴきはい出てきて、隣で昼寝をしていたもうひとりの男の鼻のあなにはいつていきました。びっくりして見ていると、くもは鼻のあなから出てきて泉水にもどって行きました。

そのとき、寝ていた男が目を覚まして、

「おれは今、このあたりに千両箱を埋めてある夢を見たよ」といいました。そして、「どうせただの夢だ。ばかばかしい」といって、よそへ出かけていきました。

これを聞いた男は、

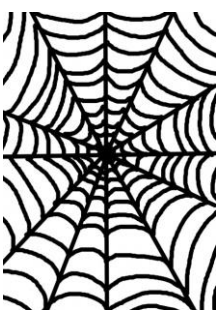
(夢はくものお告げにちがいない。くもは泉水から出てきて泉水に入ってしまったぞ。泉水の中に千両箱が埋めてあるにちがいない) と思って、夢を見た男が留守のあいだに、いそいで泉水を掘りました。案のじょう、泉水から千両箱が三つも出てきました。

男は千両箱を運びだして、伊勢の町へ行きました。そして、三千両を元手に商売を始め、じょうずにもうけて、大きな店の旦那さまになりました。

あるとき、夢を見た男が伊勢の町にやって来て、通りをうろうろ歩いていました。大きな店の中をふとのぞいたら、長者屋敷跡でいっしょだった男がいます。男はなんと、その店の旦那さまになっていました。

旦那さまになった男は、夢を見た男に声をかけられてびっくりしました。そして、「まあちよっと中へ入ってくれ」といって、お茶やお菓子を出してもてなしました。それから、こういいました。

「じつはな、おまえは、以前、長者屋敷跡で千両箱の夢を見ただろう。わしはそのとき、くもがいつぴき泉水から出てきておまえの鼻のあなに入っていく、また出ていくのを見たんだよ。それで、これはくものお告げにちがいないと思って、あとで泉水を掘った



ら千両箱が三つも出てきたんだ。それを元手にこんな大きな店を持つことができた。おまえのおかげだ」

旦那さまになった男がそういうと、夢を見た男は、

「夢では、千両箱が七つあったぞ」といいました。

「そんなら、これから掘りだしてみよう」いうことになって、ふたりで長者屋敷跡に行つて掘ってみました。すると、残りの四つの千両箱も出てきました。そこで、夢を見た男が三つとって、残りの一つはふたりで分けました。夢を見た男はそれを元手に大阪で商売を始めました。

商売はうまくいき、ふたりの店は今でも繁盛はんじょうしているそうです。

原話…『大和の伝説（増補版）』高田十郎

再話…村上郁